

第3章 放送人においてレリバントなこと—放送関係者養成専門学校を訪ねて—

樫田美雄・森川弘章

0. はじめに

われわれ2人（樫田と森川）は、1997年9月9日と9月10日の両日、大阪市内にある3つの放送関係者養成専門学校（【資料1】【資料2】参照）を訪ねて、参与観察およびインタビュー調査を行った。以下はこの「専門学校訪問調査」の報告である⁽¹⁾。

1. 目的

1-1. 研究の目的

ラジオスタジオで働いている多様な人々（放送関係者）は、大きくくくると2種類の人に別れるように思われる。一つは、放送人として専門的に訓練を受け、その訓練に基づいた職業的行動様式に従って振る舞っている人々（アナウンサー、ディレクター、メカニック担当）であり、もう一つは、専門的訓練を受けず、非職業的に放送に関わっている人々（コメンテーター、ゲスト、タレント）である。

この2種の人々のうち、ここでは「専門的訓練を受けた人々（以下“放送人”と呼ぶ）」がいったいどのような訓練を受けているのか、を実証的に調べることによって、『ラジオスタジオ』という意味空間の編成のありように迫っていきたい。というのも「放送人」こそが、『ラジオスタジオ』という“特殊な空間”の“特殊性”を体現するかたちで『ラジオスタジオ』を“志向”し、そして、『ラジオスタジオ』を作り上げている全構成員をリードしていると期待されるからだ。

探求に当たっての中心的テーマは「レリバンス」である。すなわち、放送関係者養成専門学校⁽²⁾において、いったい放送人になるということとはどのようなこととして教育されているのか（なにができる人として「放送人」は教育され、なにに気を付けるべき職業として「放送という業務」が扱われているのか）を確認することができれば、それが「放送」というものを作り上げている社会的関心の専門的な形だと見なすことができるからである。

1-2. 予備的考察：対象設定の問題—放送の現場と教育の場との異同—

しかし、上記のような研究目的にもとづいた研究を行うには、「研究の対象設定の問題」に関して若干の予備的考察を加えておく必要がある。というのも（本報告書のインタビュー記録＝第3部第2章＝でもたびたび語られているように）、ラジオスタジオでの専門的業務はその実際部分になればなるほど「ON THE JOB TRAINING」としての熟達が尊重され、仕事を体で覚えることが称揚されているからだ。すなわち、「就職前の教育の場で教えられていることが、実際の現場で実行されていることと重なるとは限らないのでは

ないか？」という疑問が有力なものとして浮かび上がってくるのである。

この問題に関するわれわれのとりあえずの回答は以下の通りである。

たしかに、実際の現場と教育の場は場面が異なる。けれども、カテゴリーとしての「放送（スタジオ、放送人、等も同様）」は、いわゆる現場のみで運用されているのではなく、社会の他の場面でも運用され、そのような運用も意味を持っている。したがって、教育の場で「放送」がどのように扱われているか、ということは、それ自身、少なくとも「教育の場における『ラジオスタジオ』研究」としては有意味な検討課題となりうる。

上記のような問題とその処理策に注意しつつ、参与観察とインタビュー調査を行った。

2. 調査の概要

調査対象としては、大阪府の電話帳に基づいて、内容にバラエティがでるよう以下の3校を任意で選んだ。すなわち、アナウンサーの養成を主とする「関西放送文化連盟」、アナウンサー（非常勤リポーターを含む）・ディレクター・メカニックの三職種のすべてに対応した教育をしている「放送芸術学院（元東通放送学院）」、そして、メカニック（録音スタッフや技術ディレクター）の養成をしている「ビジュアルアーツ専門学校大阪（元大阪写真専門学校）」の3校である。参与観察として全ての学校において講義風景（実習風景）を参観した。また、インタビューには、各校の教務担当者および講師に応じて頂いた。インタビュー期日と所属は以下の通り。

= 9月 9日 =

1) Kさん（関西放送文化連盟 教務部長・講師）

= 9月 10日 =

2) Aさん（放送芸術学院 教務課 総合タレント学科担任）

3) Sさん（放送芸術学院 講師 オフィスキーワード所属）

4) Oさん（ビジュアルアーツ専門学校 マネージャー）

4) Iさん（ビジュアルアーツ専門学校 学務部音響芸術学科・助手）

また、「関西放送文化連盟」および「ビジュアルアーツ専門学校」においては、許可を得た上で講義風景のビデオ撮りも行った。調査地に滞在中から二人は、これら資料をもとに討論を繰り返し、資料の分析を行った。

3. 結果

3-1. 関西放送文化連盟での授業について

関西放送文化連盟は、職種としてはアナウンサーのみを集中的に養成している。そこでの授業編成（3時間）は、以下のとおりであった（【資料1：スタジオ内景】参照）。

- 1) 漢字練習……黒板に10語の漢字を書き、学生を当てて読みを答えさせ、かつ意味も問う。全ての単語を当て終わった後、発声練習も兼ねて皆で読む。
例：拉致 「らち、つれさること」
- 2) 口の体操……テキスト『日本語音声学－話し言葉教本－』にしたがって、発音練習を行う。アクセント形状（平板、頭高形、中高形、尾高形）にも注意。

例：アエイウエオアオ カケキクケコカコ ……

愛 合う 合え 青

あるときは蟻あり ないときは梨もなし

- 3) 天気予報読み……FM 802 の本物の原稿を利用して、天気予報読みの練習。プリントを配布し、各自練習させた後、マイクを学生の前に置き録音する。関西弁アクセントの矯正が繰り返し指導されていた。

例：「～でしょう」は関西弁では3拍子だが、それを標準語化（2拍子）するよう指導がなされていた。講師の発声も標準語。声の高さのコントロールのために、講師が自らの声の高さを目立って上げる、というテクニックが使われていた（考察：4-1、4-2を参照）。

- 4) 近県の天気予報……ただの表の天気予報原稿をもとに、いかに言葉を足してそれを実際の天気予報とするかが学習されていた。（【資料3：「近県の天気」原稿】参照）。読み上げが自然に聞こえるための工夫が教授されていた（考察「4-3：自然さをつくる」参照）。

- 5) スタジオ実習……学生を2人ずつスタジオに入らせ、「近県の天気予報」の原稿を読ませていた。さらに、録音の結果を一緒に聞きながら指導していた。
※講師は「あまり下（原稿）を見ず、マイクを意識してね」と指導。

- 6) 講義室で置換法の訓練……3つのやり方で、「置換法」の練習がなされていた。

すなわち、

①ものを見て10の言い換え（表現）を考える訓練

例：定規を見せて、「これは私の定規です」、「これは私が買った定規ではありません」、「この定規は図を描くときに使います」……

②今日はどんな日か、学生全員（5人）に6個づつ言わせる訓練

例：「曇り、H9年9月9日、救急の日、秋、サンマのおいしい季節、梨のおいしい季節、……」

③②で出てきた30個（5人×6個）の言葉をつなぎ、文にして話す。

目的：スタジオ内でいきなり数分つないでくれと、言われたときに困らない、レポーターとして出たときに話せる。

授業のあと、教務部長のO氏にインタビューを行った。

3-2. 放送芸術学院での授業について

放送芸術学院は、学校法人立ではあるものの、無認可の「専門学校」である。無認可にしているのは、実習を自由にカリキュラムに組み込むためであり、優秀な学生はそのまま実習先に就職していくという。コースは2年コースと1年コースがあり、学科によって休む曜日は異なるが、週休2日である。

授業として、「ナレーション実習」（S講師）と、「番組構成」（A講師）を参観した。

授業の構成は以下の通り。

★「ナレーション実習」（「総合タレント系学科」授業、90分、at 音声実習室、学生10人）

講師は、事務所所属のフリー・アナウンサーのS講師

- 1) 発声練習……原稿読み、まずひとりに読ませ、次に別の一人が読み、その全体を全員が読み、また先の部分を当てられた一人が読む……。
- 2) 1分で自己PR……自己PRテープの制作を最終目標とする。原稿も学生がつくる。読み上げた原稿を講師がコメント。
- 3) 番組紹介等のナレーション録音……発音・イントネーションの指導をしていた。また、講師は指導の際に、方言の使用を避けなかった。
例：「京都会館の『ん』が抜けてるんねん」（語尾に注目、関西弁か）

★「番組構成」（「放送クリエイティブ系学科」授業、90分、at教室、学生22人）

講師は、フリーの放送作家のA講師

講義内容は、「新聞・雑誌ネタよりの構成」（TVの放送台本）。

- 1) 講師の講義……伊勢新聞の記事（古墳が発掘された場所のそばで、私的に竪穴住居をつくった人についての報道）を使って講師が台本化の枠組を示す。
- 2) 学生の実習……学生が台本を作る（素材は「音楽を聴いて育った野菜」という新聞記事）。その間、講師は机の間を回って質問を受ける。
- 3) 学生の発表……学生に台本を発表させて、講師がコメントする。

講師のコメントの要旨

①台本の書き方に決まりはないが、わかりやすいもの、ディレクターに演出イメージをわかせるものであること。番組の段取りだけでは不適。

②台本の書き方としては

- ・必要に応じセリフを入れる
- ・「質問-応答」の組み合わせを使う
例：「この2つのトマトはどう違うのでしょうか」
（ハイケア=高度管理=トマトは、水耕栽培+クラシックを聞かせている）
- ・アイデアが重要
- ・レポーターの語りだけでなく、ナレーションも入れる
- ・新聞記事から言葉をとってきてもよいが、話し言葉に直して使う。
- ・話をおもしろくするための工夫で、真実を弱めない程度で誇張してもよい。
例：レポーターが貫頭衣を着て登場するなど
- ・あまりウソをつくのはだめ

授業のあと、S講師にのみインタビューを行った。また、A教務課職員=講師併任=にもインタビューを行った。

3-3. ビジュアルアーツ専門学校大阪での授業について

ビジュアルアーツ専門学校大阪では、クリエイターを養成することを目的とした学校である。まず最初にOマネージャーの説明を聞き、その後I助手に「デジタル・ミキサー卓の操作方法」を実演してもらった。最後に、「録音実習」の授業を見学させてもらった。

★Oマネージャーの話

- 1) 音響芸術学科・ラジオ番組制作専攻では、ディレクターの養成は行っておらず、ラ

ジオドラマづくりを行っている。

- 2) マニュアルにないような高度な技術も実習の中で教えている。
- 3) ディレクターとメカニック担当との間の仕事上の境界は、マニュアル化されていない。けれども「あうん」の呼吸がプロの間にはある。

★デジタル・ミキサー卓の操作方法（I助手）

- 1) 最近ではデジタル録音が主流である
- 2) 今年（1997年）2月に、新型のデジタル・ミキサー卓『YAMAHA O2R』（68万円）を導入した。
- 3) 先行機種からの改善点が多数ある。
 - ・普通のアナログミキサーでは、相対的にしか強調できなかったが、デジタル化したため、個別の波長に対する絶対的な強調が可能になった。
- 4) しかし、放送局ではまだこの機械を導入していないから、これを学んでも現場に出るととまどったりする、ということが起こりうる。

★「録音実習」（講師氏名不詳、スタジオ・インフィニティ、少なくとも学生4人）

- 1) ギター演奏を録音する実習、ほとんど個人指導
- 2) メカニックのトラブルで音が出ない際に、それぞれが独り言でいう言葉が（比較的大きな声で発話されているため）全体に共有されて結果として、問題が解決されていた。

例：原因を探す＝マイクの交換→マイクではない→ケーブルの交換→ケーブルではない→操作卓のモジュールの切り替え→成功

トラブルの時事刻々の状況は、「独り言の共有」によって、全員に共有されていた。

4. 考察

4-1. 方言の位置づけ

関西放送文化連盟では、教師も標準語を話し、学生も標準語を話すべく訓練されていた。それに対し、放送芸術学院の授業では、講師みずから方言で指導をしていた（「3-2」の「ナレーション実習」参照）。これは、育てようとする職種が、アナウンサー（関西放送文化連盟）であるか、タレント・リポーター（放送芸術学院）であるかの差によるのだろう。しかし、「[アナウンスの] 仕事では関西弁も使うときがあるが、[アクセント辞典などの] 本がないので、耳で覚えるしかない」という談話が「ナレーション実習」のS講師から採れていることを考え合わせると、少なくとも放送芸術学院から就職するような職種のアナウンサーにおいては、放送人だからといって、標準語教育の徹底が必要だと思われる訳ではない、といえるだろう。

4-2. 学校でのテクニック/現場でのテクニック

関西放送文化連盟では、様々な「教えるテクニック」が使われていた。たとえば、学生の声の調子が高いときに、それを低めるために講師はより高い声で話すというテクニックが使われていた（より高い声を聞かされると聞かされた方の声は低くなるという＝講師談

=)。これは、「まねをさせる」以外の教育方法が、放送関係者養成学校で使われている例として評価することが可能だろう。「1-2：予備的考察」で述べたこととも関連してこの部分は重要に思われた（学校でなされていること=文化=と、現場でなされていること=文化=が異なっている可能性）。

4-3. 「自然さ」をつくる

関西放送文化連盟においては、アナウンサーの技術として、放送芸術学院においては放送台本制作者の技術として、「自然さ」を作るテクニックが教授されていた。すなわち、「関西放送文化連盟の授業では、読み上げ原稿の形になっていない表を天気予報として読む際に、「原稿にことばを書き加えないようにする」ことが指示され、その理由として「原稿に言葉を書き加えると、①書き加えないと読めなくなる、②つくったように聞こえる」の2点が欠点として挙げられていた。さらに「とちりながらしゃべったほうが自然でもある、流暢に天気予報を読めればわかりやすいというわけではない」とも付け加えられていた。

また、放送芸術学院の授業では、古墳跡での私設竪穴式住居を紹介する際に、「貫頭衣」を着てレポーターが登場するような質の台本が、わかりやすい、オーソドックスな台本であるとして評価されていた。連想の自然な流れとして「竪穴式住居／貫頭衣」が採用されたといえよう。とするならば、これも一種の「自然さ」づくりのテクニック教授とみなすことができるように思われる。

このような「自然さ」へのこだわりは、ライブ感重視の現在の放送界の趨勢とも関係があるかも知れないが、より根元的には「語りかけ」としての質を維持するという意味があるように思われる（ちなみに、言い回しの上でも「海上」を「海は」、「所により」を「所によって」と言い換えて、話し言葉としてなじみのある言い回しとするよう指導がされていた）。すなわち、「リスナーへの志向性」がここで“放送人”にレリバントなものとして扱われている、と結論づけてよいのではないだろうか（「話し言葉化」については、「3-2」の「番組構成」の部分も参照のこと）。

4-4. リスナーへの志向性

「リスナーへの志向性」が重視されている証拠はまだほかにもある。たとえば、関西放送文化連盟の「スタジオ実習」において、「原稿ではなく、マイクを意識するように」と指導されていたことはその例であろう。

4-5. 常識的な“意外性”-放送（人）に要求されるもの-

放送文化連盟の「置換法」の訓練は、授業を担当していた教務部長の説明によれば、レポーターとして現場に出たときのフリートークのための訓練だという。すなわち、リアリティとライブ感のある実況中継をするための訓練であると言うのである（本章の「3-1の（6）」での記述を参照のこと：具体的な指導においては、少し気が効いていて、それ

でいて常識の再確認の範囲に収まるような水準での連想が称揚されていた。素早さの方が、新鮮みよりも重視されているようだった)。しかし、この目的はその訓練法が実際に載っているテキスト〔水谷、出版年不明〕での訓練目的とは異なっている。テキストでは置換法は、別の目的(対面時話の引き出し方)の訓練のための練習方法として存在しているのであり、フリートークのためにこの練習方法を使っているのは、教務部長のOさんの創意なのだという。この食い違いが意味しているものは何だろうか。Oさんの創意が志向しているものを確認することがここでは重要だろう。そのように考えてみると、ここにも「リスナーの影」が見て取れるように思われる。すなわち、「どんなものについてもちよっとだけ新鮮で、しかも多くの人に理解が容易な言い換えがすぐにできるようにする」この訓練は、「リスナーに聞き飽きない、けれども理解可能な放送をする」というアナウンサーへの職業的期待とマッチしたものと考えられるのではないだろうか。発想法として見たときの「置換法」の特徴＝「オリジナリティより、わかりやすさ重視」は、やはり「リスナーへの志向性」が放送関係者養成専門学校で重視されていることの証拠といえよう。

なお、「放送芸術学院」においてなされていた「1分で自己PR」(in『ナレーション実習』)においても、同様の「リスナーへの志向性」への関心を見て取ることができるように思われる。すなわち、そこでは講師が「個性のどやっ〔文章のこと：檉田・森川注記〕を何でも引用したら〔いい〕」と発言し、「引用で組み立てる個性」が称揚されていた。この授業はタレント養成の授業であって、アナウンサー養成とは異なるが、放送において評価される個性が「100%のオリジナリティ」というよりも、「親しみやすいオリジナリティ」＝「常識的な“意外性”」と呼べるような穏当なものであることの例証にはなっているだろう。

「常識的な“意外性”」は、放送人の個性(として称揚されているもの)の特徴であるだけでなく、放送台本の特徴でもあった。「3-2」で触れたように、放送台本を添削する講師は、その台本が一方では「おもしろいもの(興味を引くもの、意外であるもの)」であることを要求しつつも、その一方で「あまりウソをつくのはだめ」と意外性の程度を抑制していた。

4-6. “独り言”の共有-プロであること-

「3-3」の「録音実習」のところでみたように、「録音室」では、生じているトラブルの時事刻刻の変化が、「独り言の共有」という形で、全員に同時的に理解されていた。われわれはそれが講師からの指示がない中で当たり前に行われていたことに注目したい。すなわち、このような音声を利用した業務情報の伝達テクニックは、身体化された水準に達しているのである。このような身体化が完成したとき“プロ”になったと呼ばれるのではないだろうか(プロは「あうん」の呼吸が身に付いているという「3-3」でのOマネージャーの発言も参照)。

5. おわりに

本報告では、大阪にある3つの放送関係者養成専門学校を訪ねて、見たこと・考えたこ

とを報告してきた。このような「学校での実践」についての発見がそのまま「放送スタジオでの実践」についての発見として読み替え得るものである、と見なすわけにいかないことについては、「2-2：予備的考察」で述べた通りである。しかしながら、たとえそれがスタジオ現場のものと違っているにしても、学校現場での「放送」の扱われ方のなかには、われわれにとって有意味な「放送（人）」への標準化された期待が含まれているのではないだろうか。今後は、調査時に撮影したビデオの分析もすすめて、この期待のよりくっきりとした相貌を明らかにしていきたいと考えている⁽⁴⁾。

注

- (1) 『社会調査実習報告書（第一版）』には、本報告は掲載されていない。本報告書（第二版）掲載分が「専門学校訪問調査」に関する最初の報告である。
- (2) 放送関係者とここで呼んでいるものには、お笑いタレントなどが含まれる（実際に「放送芸術学院」で養成している）。
- (3) 本報告は、その元になるレポートを森川が〔森川、1997〕として作成し、樫田がそれを再編のうえ、加筆修正を加える形で作成した。

参考文献

- 水谷謙吾 出版年不明 『日本語音声学—話しことば教本—』（1997.9.9『関西放送文化連盟』にて入手、徳島大学総合科学部樫田研究室に所蔵）。
- 森川弘章 1997 『「関西放送文化連盟」・「放送芸術学院」・「ビジュアルアーツ専門学校大阪」見学についてのレポート』（徳島大学総合科学部樫田研究室に所蔵）。
- 日本民間放送連盟（編） 1991 『放送ハンドブック—文化をになう民法の業務知識—』東洋経済新報社。

【資料1：スタジオ内景（関西放送文化連盟）、1997年9月9日撮影】



【資料2：訪問先一覧】

(1) 株式会社 関西放送文化連盟

〒540 大阪府中央区内本町2-3-11 TEL:06-943-1467

<地下鉄谷町線谷町4丁目駅③出口より徒歩5分>

学科：アナウンサー育成部・本科、学術科、講師コース

(2) 学校法人 放送芸術学院

〒550 大阪府西区北堀江2-4-4 TEL:06-533-5050

<地下鉄四ツ橋町線四ツ橋駅徒歩5分>

学科：番組企画系学科、放送クリエイティブ系学科、制作エンジニア系学科、総合タレント系学科、放送美術系学科、放送デジタル系学科、

(3) 学校法人 大阪デザイナー学院 ビジュアルアート専門学校大阪

〒530 大阪府北区曾根崎新地2-5-23 TEL:06-341-4407

<JR大阪駅より徒歩七分>

学科：音響芸術学科（ラジオ番組制作専攻を含む）、放送・映画学科、マルチメディア学科、写真学科

【資料3：「近県の天気」原稿】

京都府南部			兵庫県南部			大阪府		
風	天気		風	天気		風①	天気②	
北西の風	201 曇り時々雨 山沿いに晴れ 所により雪		や北や西の強い風 一時	101 晴れ時々曇り 所により雪		や北や西の強い風 一時	101 晴れ時々曇り 山沿いに晴れ 所により雪	
海上	後波 0.1メートル 5メートル		海上	後波 0.1メートル 5メートル		海上①	海上②	
6-12℃ 20%	12-18℃ 10%	18-24℃ 10%	6-12℃ 20%	12-18℃ 10%	18-24℃ 10%	6-12℃ 10%	12-18℃ 10%	18-24℃ 0%
予想気温 京都			予想気温 神戸			予想気温 大阪		
最高 11度 平年比 -2度 今日比 1度			最高 12度 平年比 -1度 今日比 1度			最高 12度 平年比 -2度 今日比 1度		
最低 5度 平年比 1度 今日比 0度			最低 6度 平年比 0度 今日比 1度			最低 7度 平年比 1度 今日比 1度		

近県の天気
1
十二月 一日 十八時 発表
御中